

仏教企画通信

78号

発行日 | 令和7年1月1日

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
編集 | 加藤順子

Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

宗教は平和の基盤になり得るのかと問われたら、残念ながら疑問符をつけざるをえない。キリスト教の世界には、法王の名において十字軍を派遣し戦争を遂行した歴史があるし、国王がおこなう戦争においても聖職者たちは戦争を正当化する論拠を神の名において提供してきた。今日でもロシアによるウクライナへの侵略を、ロシア正教は正義の戦いとして承認している。さらにキリスト教世界では、自分たちにとって都合な人々を異端として認定し、火あぶりの刑に処してきた。

生ずることもあった。しかし、それでもなお日本の宗教、信仰は平和的であったと感じられる。対立があってもその対立は相手を殲滅しようというようなものではなく、戦国時代の一揆への合流は、戦国大名の支配から自由

いる。この年に百済の聖明王から經典と仏像がもたらされた。ただし、この頃の日本の支配者たちは、仏教をインドで生まれた宗教としてとらえていなかった。「仏」を蕃神すなわち外国の神として位置づけ、外国の神を導入すべきかどうかをめぐって論争が起きた。排仏派は外国の神を導入すれば日本の神々が怒ると主張し、崇仏派は仏像や經典をもつ、すなわち優れた文化をもつ外国の神を導入しようと考えた。この論争は蘇我氏などの崇仏派の勝利に終わり以降日本の地に仏教が定着していくようになる。

公式仏教が伝来したとされる500年代とその後には、多くの渡来人が日本に渡ってきた時代だった。朝鮮の新羅や百済から来た人が多かったようだが、中国からの渡来人もかなりの数に上っていたらしい。その人たちは本国で暮らした時代の信仰や宗教を携えてやって来たことだろう。当時の中国、朝鮮の宗教といえば、儒教、道教、仏教が想定されるが、儒教は日本では古代権力のなかでは重要視されても、民衆のなかに浸透す

道教のものだし、自然な生き方がよいとするのも道教思想である。端午の節句や七五三といった風習も道教からきている。他方で仏教は複雑である。公式仏教と呼んでいるものは、中国で儒教思想と融合し、変形して日本にもたらされた仏教だった。だからそれは国家護持のための仏教だったのである。ところがもうひとつ、民衆のなかに伝播していった仏教があった。おそらくそれは渡来人たちがもたらした仏教から広がっていったのだらう。前記した司馬達等は民間人であるが、蘇我馬子が飛鳥寺をつくったとき、馬子の娘とともに司馬達等の娘も尼僧として飛鳥寺に入っている。さらに達等の孫は飛鳥時代の代表的な仏師として活躍した鞍作止利である。彼の代表的な作品には飛鳥大仏や法隆寺の釈迦三尊像などがある。すなわち司馬達等は民間の渡来人といっても蘇我氏と交流のある有力者だった。だから草堂をつくり仏像を安置していたという記録も残ったのだらう。

おそらく当時の日本には記録に残っていない、仏教を信仰する渡来人たちがいたのである。その人たちが民衆社会と融合していくに従って仏教的な考え方を広めていった。そして、だからこそ民衆仏教の修行の場は、寺という構造物のなかではなく自然のなかだったのである。とともにこの世界からは、次第に密教との関係を深めていく修験道や、『法華経』の靈力を信じ

から經典と仏像がもたらされた。ただし、この頃の日本の支配者たちは、仏教をインドで生まれた宗教としてとらえていなかった。「仏」を蕃神すなわち外国の神として位置づけ、外国の神を導入すべきかどうかをめぐって論争が起きた。排仏派は外国の神を導入すれば日本の神々が怒ると主張し、崇仏派は仏像や經典をもつ、すなわち優れた文化をもつ外国の神を導入しようと考えた。この論争は蘇我氏などの崇仏派の勝利に終わり以降日本の地に仏教が定着していくようになる。

公式仏教が伝来したとされる500年代とその後には、多くの渡来人が日本に渡ってきた時代だった。朝鮮の新羅や百済から来た人が多かったようだが、中国からの渡来人もかなりの数に上っていたらしい。その人たちは本国で暮らした時代の信仰や宗教を携えてやって来たことだろう。当時の中国、朝鮮の宗教といえば、儒教、道教、仏教が想定されるが、儒教は日本では古代権力のなかでは重要視されても、民衆のなかに浸透す

道教のものだし、自然な生き方がよいとするのも道教思想である。端午の節句や七五三といった風習も道教からきている。他方で仏教は複雑である。公式仏教と呼んでいるものは、中国で儒教思想と融合し、変形して日本にもたらされた仏教だった。だからそれは国家護持のための仏教だったのである。ところがもうひとつ、民衆のなかに伝播していった仏教があった。おそらくそれは渡来人たちがもたらした仏教から広がっていったのだらう。前記した司馬達等は民間人であるが、蘇我馬子が飛鳥寺をつくったとき、馬子の娘とともに司馬達等の娘も尼僧として飛鳥寺に入っている。さらに達等の孫は飛鳥時代の代表的な仏師として活躍した鞍作止利である。彼の代表的な作品には飛鳥大仏や法隆寺の釈迦三尊像などがある。すなわち司馬達等は民間の渡来人といっても蘇我氏と交流のある有力者だった。だから草堂をつくり仏像を安置していたという記録も残ったのだらう。

おそらく当時の日本には記録に残っていない、仏教を信仰する渡来人たちがいたのである。その人たちが民衆社会と融合していくに従って仏教的な考え方を広めていった。そして、だからこそ民衆仏教の修行の場は、寺という構造物のなかではなく自然のなかだったのである。とともにこの世界からは、次第に密教との関係を深めていく修験道や、『法華経』の靈力を信じ

平和的な日本の信仰について考える

宗教と信仰の民衆
節山内

になろうとする民衆に仏教勢力が合流したものである。とするとなぜ日本の仏教や伝統的な信仰は平和的であったのか。今回はそのことを考えてみようと思う。

公伝された仏教

日本に仏教が伝来したのは、公式には538年(『元興寺縁起』による。なお『日本書紀』では552年)とされて

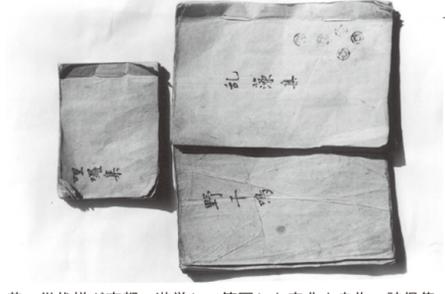
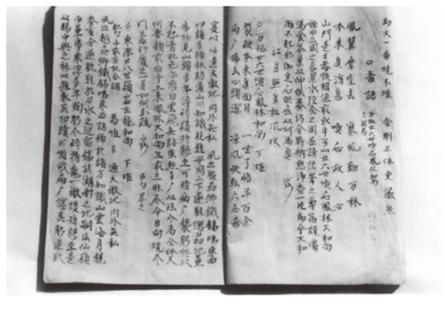
書かれた日本初の民間の手による歴史書『扶桑略記』には、522年に中国から日本に渡来した司馬達等が、奈良の郊外に草堂をつくり仏像を安置していたと書かれている。『扶桑略記』を書いたのは比叡山の僧侶であるが、この記録が事実だとすれば、公式仏教の伝来以前から渡来人の手によって伝えられた民間仏教が存在していたということになる。

ることはなかった。儒教は国家があり国王がいてこそ社会が成立し、社会の安寧がはかれるという思想をもっている。だから国王の忠臣であることが何よりも重要なのである。それは民衆にとっては意味のないことだった。それに対して道教はけっこう日本の社会に浸透しているのだけではないから実感がないだけである。たとえば清貧に生きること理想を感じる思想は

701年に大宝律令がつくられたが、そのなかに僧尼令

私度僧による民衆仏教のおこり

がある。僧尼令では僧侶を国家が管理し、一定の庇護を与えることが定められているが、同時に私度僧の禁止、山林修行の禁止、民衆への仏教布教の禁止が打ち出されている。当時の公式仏教の世界では、僧侶は国家が承認した官僧として存在していた。だから民衆仏教の聖たちは公式には得度をしていない、つまり勝手に修行をし、民衆から僧として認められる人であり、私度僧として活動していた。この私度僧の修行の場は寺ではなく山のなかだった。森のなかで修行をしたのである。それを古代には山林修行といった。民衆への布教を禁止したということは、国家にとっては禁止しなければいけないほどに民衆仏教の世界が広がっていたということなのだろう。とともにこの仏教は、日本の古来からの信仰である自然信仰とも習合していた。自然の奥に穢れなき真理の世界があると感じ、そこに神の世界をみいだす。さらに自我をもち、欲望を抱く人間のあり方に穢れをみながら、いつの日か自然的人間として生まれ変わることに望みもちつつける。日本の自然信仰は仏教と習合して、このような思想を確立していった。そして、だからこそ民衆仏教の修行の場は、寺という構造物のなかではなく自然のなかだったのである。とともにこの世界からは、次第に密教との関係を深めていく修験道や、『法華経』の靈力を信じ



昔の世代様が京都へ遊学して筆写した宗典や自作の詩偈集 (明治初年、龍泉院29世豊洲大由書)

に、各寺院の必要に応じて、

三

前掲の如き大出版物のほか、各寺院の必要に応じて、

各種の辞書・地図・年表などの「工具書」がある。「工具」とは、日本では工作に使用する器具・道具をいうが、中国ではもっと広い意味で、手仕事や労力の他に解題・趣芸一般の助けになるものすべてを指す。

すると、仏教寺院で最も必要な工具書は、まず仏教辞典であろう。仏教辞典が皆無な寺は、お寺とはいえないのではないだろうか。ところがこれも多種多彩であり、厚巻大冊から片手に乗る小辞典まで刊行物はすくぶる多い。だから、どんな「工具書」を選ぶかというための参考文献が便利である。それには『仏教書総目録』がある。最寄りの本屋に頼めば安価で入手できるし、無料で頂ける場合もある。この本には、宗派別・内容別著編者別・書名別に付いているから便利である。ただし、該書は現在購入可能な現行書目録であるから、前記「禅籍目録」のような訳にはいかない。

出版社別にその出版物が羅列されているのも便利である。歴史や古文書は苦手な方でも、本寺と末寺の関係や昔の「何石取り」などの寺勢に関心の強い方は案外多い。それらを知るべき格好の工具書を紹介しよう。それは『延享度曹洞宗寺院本末牒』(2002年7月、東京、目黒区)である。この本は大本山總持寺に秘蔵されたものを昭和19年に刊行され、2002年に再版されたものである。実は私の「駒大図書館時代」に再版の談があった時、私は索引を付ければ数倍の価値が付くから是非索引を強く進言し、当時同図書館内で活動していた6名の方々の手を煩わして成ったものである。本書には索引のみならず解説も付けられている。私達作成者は再版の時、貫主岩本勝俊宛に招かれて恩賞に預かった。今では古書の一冊だが、入手できればこれも寺宝である。古

文書を解説し、金石調査を実施し、各資料を豊富にして自分の寺の寺史を作成する奇特な方も少なくない。大藍の場合は、大学の史学科の手を借りることもある。これを宗務所単位で行ったり、曹青の事業で行動する場合もある。私はこうして成った都道府県別の宗門寺院史を20点あまり、個々の寺史は30点あまりを集めている。都道府県別のものは昭和末期ごろから行われ、私の所蔵では茨城や新潟のものが秀作であり、地元千葉では早期に作成したにも拘わらず、昔は僧録であった別格寺院が落ちていたり、ある地区だけは無記入であったりと、基本的な点で欠陥が余りにも多い。これは宗務所の業で教化主事が任期中の完成を企つたことのツケである。だからこの種のものには急いでほならない。また学問(できれば史学)的な人材を入れるべきである。このように、時・人・金の三つを兼ねなくしては寺院史の良いものは出来ないことを銘記しなければならぬ。何だか、選挙の出馬条件のような結論になったが、むしろその前提は人の健康である。私は車椅子で何も出来ないものであるが、せめて出来る事として構想を練ることや過去の写真類(種々の調査写真、参禅会活動、海外訪問時)何千枚かを仕分けすることをやっている。

業界誌としては、すでに私が生まれた1934年に創刊された『大法輪』は、仏教全般の総合雑誌であるから、購読者も多いであろう。ここに



椎名宏雄(いなこうゆう) 龍泉院(千葉県柏市)前任職。駒澤大学大学院博士課程満期退学後、曹洞宗宗学研究所研究員、曹洞宗文化財調査委員、柏市文化財保護委員会会長、駒澤大学大学院非常勤講師等を兼務しながら一九五八年より龍泉院住職。「宋元版禅籍」の研究(大東出版社)、「やさしく読む参同契・宝鏡三昧」(大法輪閣)、「沼南町の宗教文化誌(たけしま出版)など著書・共著ともに多数。

生活者の求める 平和とは

日本の仏教や信仰には、このような基盤が形成されてきたのである。いわゆる教義に深いこだわりがあるわけでもないし、教団第一でもないところだが、にもかかわらず、仏教的な信仰心は深く染みついていて、それが民衆仏教である。そしてこのような民衆のあり方と接点をもちなながら、公式仏教もまた変化していった。その先駆けとして、国家護持の仏教を堅持しながら民衆仏教の世界を包み込もうとしたのは空海の真言密教の形成だった。さらに山林修行の世界で広がった阿弥陀信仰が里にも伝えられ、それを教義的にも位置づけていこうとしたとき浄土系の仏教が生まれた。民衆とともに歩もうとした鎌倉仏教の根底には、古代に展開していた民衆仏教の世界があった。

そして、だからこそ日本の仏教は、生活者が求める平和と結ばれていた。宗派間の対立を生むこともなく、自分の檀家寺の宗派と違う寺に行っても手を合わせ、仏の世界に祈りを捧げる。神にも仏にもありがたさを感じ、ときに欲望とともにある現実世界に疑問を抱く。そこにあるのは生活者が求める平和であり、それと結ばれた仏教や信仰である。宗教教義のなかに、平和を求めるといって、平和ではない。むしろ、たとえばキリスト教の世界では、神の名においておこなわれた戦争や殺戮がどれほど多かったことか。それに対して仏教はこの世界が虚無であり、空であることを、さらには自己もまた空であることを教える思想なのだから、ここからは戦争を推進する論理はでてこないはずである。だが教義や教団が虚無や空ではなくなり、有として位置づけられたとき、仏教の世界でも教団のための戦いを登場させることはあった。さらに昭和の戦争時には、教団は組織防衛のために戦争協力に向かっただけである。だが、それでもなお日本の仏教は平和を求めていた。古代につくられた公式仏教とは異なる民衆仏教の世界。そこに出発点をもつ民衆仏教は、生活者の求める平和を内包していたのである。



内山 節(うちやまたかし) 哲学者。1970年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』(全15巻、農文協)『半市場経済成長だけでない「共創社会」の時代』(角川新書)他多数。

私はかつて、宗門の寺院数は何万か寺もあり、大藍名刹とされる寺、また現に各自自治体に所属する名刹寺院は、何百という支配下寺院を擁していたと思っている。であれば必然的に高僧名僧も多く輩出され、多くの隠れた語録や著述が残されたのは必然であったと思量される。それら先輩たちの遺著、また現代の好著良書のうち、宗門寺院でこれはない限りであるが、永年文献研究を専門としてきた

者として後学の方々に一つでも益する所があればとの意志からあえて筆をとった次第である。本来なればこんな大きなテーマは、宗門のリーダーである宗務総長か、または両大本山の監院クラスの方が唱導すべき問題なのである。それはともかくとして、我々は書物によって己れの人生を豊かにし、彩りを増す。好嫌の差はあっても、それは動的な業務やスポーツとは異なり、眼力や手が正常に機能する間は、天が与えてくれた有難き恩恵の行使によって可

能であろう。だがしかし、宗教者として、果たしてこうした天賦の恩恵をどれだけ活かしているだろうか。私は過去に36年間、宗門の文化財調査に携わってきたし、また20年間は宗門寺族の通信教育レポーターの添削や諸方での講師を務めてきた。また、個人的には禅籍の文献史に深入りし、これは今なお継続している。こんな経歴から頭切りのような問題を考えざるを得ないのであるが、しかし天賦享受の反面、現在の自分自身

は自他の別なく仏教の工具書が多数掲載されている。『大法輪』を地味な工具書とすれば、現代に即応した新規な工具書が『月刊住職』である。一時期「寺門興隆」と改称していたがすでに創刊50年、記事は工夫して改良を重ね、説・敷地・建物・建築・行事・経営など、寺院に関するあらゆる時事問題を扱い、宗派ごとの比較・統計・法律相談・税務相談、書籍コーナー(難題付き)、専門家や著名人の卓話なども扱い、寺院から専門研究者に広く読まれているだろう。



昔は本堂の片隅に置かれていた書籍箱(千葉県 龍泉院)

『曹洞宗全書』全33巻は、我が宗門先人の遺してくれた宗室であるが、分量的な問題やヤミで1冊10万円という価額

宗門寺院に 必備の書籍

千葉県柏市 龍泉院東堂 椎名宏雄

一

大事故による半身不随で車椅子という半身の身であるから、とても有益な事は書けそうになく、まともな書籍はみな寺に置いてきて手が届かないこともあり、以下の事項は頭に残っている記憶や願望的事項が多いことを予めご海容いただきたいと思う。

二

36年間の文化財調査や、重複もあるが20年に及ぶ寺院研究により、教えられた事や考えさせられた事は頗る多いが特に驚かされたのは、宗門寺院は概して基本的図書の在庫が貧弱だということである。私は本堂を改築して落慶の際、随喜されたご寺院方に引き出物として、道元禅師の『真筆集成』の厚巻を差し上げたが、後に教区内の某寺院では永らく埃に埋もらされているのを見て、心を暗くしたことがある。だから千葉は無仏法寺院が多いといわれるのだ。基本的に『禅学大辞典』や『新纂禅籍目録』、『曹洞宗全書』を常置している寺院は暁天の星である。前者は禅籍、特に古書の名称を知るための必備の辞典であるというのに。私はどうの昔目もヨレヨレながら、まだ常時お世話になっている。なぜそんな早くからダメにしたかといえば、この辞書は優秀な編集であり、その特長は沢山あるのだが、敦煌文書の名称はきわめて少ない。また、明版大蔵経に収録されて

る法華行者なども生み、さらには阿弥陀信仰の広がりなどを形成しながら、教団を成立させない民衆仏教の世界をつくりだしていった。

れと結ばれた仏教や信仰である。宗教教義のなかに、平和を求めるといって、平和ではない。むしろ、たとえばキリスト教の世界では、神の名においておこなわれた戦争や殺戮がどれほど多かったことか。それに対して仏教はこの世界が虚無であり、空であることを、さらには自己もまた空であることを教える思想なのだから、ここからは戦争を推進する論理はでてこないはずである。だが教義や教団が虚無や空ではなくなり、有として位置づけられたとき、仏教の世界でも教団のための戦いを登場させることはあった。さらに昭和の戦争時には、教団は組織防衛のために戦争協力に向かっただけである。だが、それでもなお日本の仏教は平和を求めていた。古代につくられた公式仏教とは異なる民衆仏教の世界。そこに出発点をもつ民衆仏教は、生活者の求める平和を内包していたのである。

文書を解説し、金石調査を実施し、各資料を豊富にして自分の寺の寺史を作成する奇特な方も少なくない。大藍の場合は、大学の史学科の手を借りることもある。これを宗務所単位で行ったり、曹青の事業で行動する場合もある。私はこうして成った都道府県別の宗門寺院史を20点あまり、個々の寺史は30点あまりを集めている。都道府県別のものは昭和末期ごろから行われ、私の所蔵では茨城や新潟のものが秀作であり、地元千葉では早期に作成したにも拘わらず、昔は僧録であった別格寺院が落ちていたり、ある地区だけは無記入であったりと、基本的な点で欠陥が余りにも多い。これは宗務所の業で教化主事が任期中の完成を企つたことのツケである。だからこの種のものには急いでほならない。また学問(できれば史学)的な人材を入れるべきである。このように、時・人・金の三つを兼ねなくしては寺院史の良いものは出来ないことを銘記しなければならぬ。何だか、選挙の出馬条件のような結論になったが、むしろその前提は人の健康である。私は車椅子で何も出来ないものであるが、せめて出来る事として構想を練ることや過去の写真類(種々の調査写真、参禅会活動、海外訪問時)何千枚かを仕分けすることをやっている。

業界誌としては、すでに私が生まれた1934年に創刊された『大法輪』は、仏教全般の総合雑誌であるから、購読者も多いであろう。ここに

必須の工具書では、他に漢和辞典・国語辞典がある。前者は専門家向けの諸橋轍次『大漢和辞典』13巻(大修館書店)が最大である。しかし並べて1メートル以上になるから、普通は中辞典で充分。私は長く使用しているのは三省堂の『漢字海』(2000年1月初版)で戸川芦郎監修書で安康高校生以上なら優に生涯使用できる。右の『大漢和』をコンパクトにしたようで、古典の典故や句法・類義語なども豊富。例えば私の好きな文字の一つに「坵(ごみ)」があるが『大漢和』にしかなかったと思っていたのに、この辞典には堂々たる親字として所載され、その用例まで載っているのには驚く。国語辞典はなお更昔から豊かであるが、仏教者としては『岩波国語辞典』が中辞典では格好であろう。横書きであるが語彙も豊かで多少は知りたい他宗教・他宗派の事柄もかなり載っていて

いる典籍名は大むね揃っているが、それ以前の宋版・元版の大蔵経(一切経)に収録されている典籍名は逆にほとんどない。これでは専門研究は不可能である。私は必要からではあるが、それらを一々記入し、また他文庫(例:岸沢文庫、叡山文庫など)の禅籍をどしどし記入し、また自分で購入した新旧の禅籍記入、コピーした禅書の記入、中国・韓国などで需めた禅籍の書込みなどを繰り返すうちに、どんどん膨れ上がり、白い部分は真っ黒くなってしまった。第3冊目を探しているが、これは昭和37(1962)年6月に駒澤大学図書館長の小川靈道氏が生涯を掛けて完了した畢生の大作であるから、簡単には再版されないであろう。若し入手可能な方は、是非座右に常置して寺宝としていただきたい。



エイト氏が長年追求してきた、旧統一教会と自民党との関係についても、引き続き注視していく必要がある。本稿執筆中、新たに石破政権が誕生した。だがその過程で、有権者はひとつ唾然とするような政権与党の態度を目撃することとなった。自民党総裁選のさなかの出来事である。夜のニュース番組で総裁候補9名が討論に出席した。その場

自民党のいま

に頼って生きなければならぬ側面がある。しかし、その個を超えた存在が私たちに影響力を行使してくるとき、どこから異常事態であるのかその線引きを事前にしておかなければ、簡単に飲み込まれてしまうということだろう。

で司会者に「自身が総裁になつた場合、教団との関係に關する再調査を行うか」を問いかけられた。しかし石破茂氏を含め、再調査をすると答えた候補は一人としていなかったのだ。

この場面は、朝日新聞が2013年に安倍元首相が自民党総裁に就任して旧統一教会会長らと面会をしていたものだとする写真を掲載した直後のものだった。いわば、自民党がそれ以前の調査で出した「教団との組織的な関係はなかった」との結論を覆すものであるとの見方も出る中できごとであった。

たった一人でも再調査を行うという候補がいれば、いくらか違った印象を残すことができただろう。しかしこれでは国民の間には「集団で何かを隠しているのではないか」と疑念が生じるのも無理はないだろう。

エイト氏の取材活動は長らく注目されることのない時期が続いた末、安倍元首相の銃撃事件によって大きな注目を浴びた経緯がある。それは裏を返せば、あのような襲撃事件がなければ、いままでも多くが語られないままであつたかもしれないということを意味する。そのような事態にならないよう、私たちはこれからも旧統一教会問題の推移を注視していく必要があるのではないだろうか。

顕彰碑除幕式



故佐々木宏幹先生の 顕彰碑除幕式に出席して

佐藤憲昭



2024年9月15日(日)午後3時より、宮城県気仙沼市三日町2-3-2の少林寺(千葉徹心住職)において、故佐々木宏幹先生の顕彰碑除幕式が行われた。除幕式に先立ち、今年の2月に亡くなられた先生の納骨(分骨)の儀礼が執り行われた。少林寺の墓地中央(御開山)の右手に、先生のご両親様のお墓があり、そのお墓に納骨されたので、親子3人、水入らずで眠られている。顕彰碑は墓地中央の左手に建立された。小野崎秀通老師と同寺護持会の齋藤克之会長が幕を引き、披露された後、教え子と縁者の参列者が焼香された。顕彰碑は台座を含めると二メートルに近い大きさで、先生の功績を讃えるのに相応しいものであった。碑には「佐々木宏幹翁/沙門靈樹/令和六年二月二十六日遷化/世寿九十三歳/駒澤大学名誉教授/宗教学者/シャーマニズム研究第一人者/著書多数」と刻まれている。先生は1930年5月17日、

少林寺で生まれた。2歳のときに住職のご尊父様(享年37歳)を、3歳のときにご母室様(享年26歳)を亡くされ、寶鏡寺の、母方の祖父に育てられた。その後について、先生は次のように述懐されている。「中学三年のときに敗戦となり、祖父が途中で亡くなりまして、寶鏡寺にいとこ筋の人たちがやって来たわけです。……兄弟の多いとこが入って来て、住職を叔父さんが継ぐようになってから、私はいとこ同士のなかで一番年上だから、ものすごく気を遣ったんですね。十七、八で高等学校を終えてから、大学へ入るのにできるだけ自分の力だと思つて、少しお金をためようとして、ちょうど自分の卒業した小学校の代用教員が必要だということで、小学校の教員を二年半やることになりました」(曹洞禅グラフ)146号、2018年、仏教企画)。

こうした、辛く厳しい経歴を経て、1951年4月、駒澤

カルトの闇に 向き合う ジャーナリスト

旧統一教会の問題を長年取材してきたジャーナリストの鈴木エイト氏のお話を聞く機会に恵まれた。旧統一教会に關しては、仏教企画においても宗教二世の被害女性や、脱会活動に携わる男性職員を取材し、問題を注視してきた経緯がある。今回はその宗教二世の女性がインタビューを行い、曹洞禅グラフに寄稿するかたちになった。ここでは、曹洞禅グラフに記述しきれなかった部分を記していきたい。

矢田海里

鈴木エイト氏の活動

鈴木エイト氏とカルト問題とのかわりは、2002年契約社員として都内の会社で働いていた時期に、渋谷で旧統一教会による偽装勧誘の現場に遭遇し、介入したことに始まるという。最初の5年くらいは、繁華街や駅前などで行われていた勧誘活動を阻止していたが、次第にブログを書くようになり、やがて脱カルト協会などのつながりも生まれ、記事を書くようになった。

エイト氏の活動は勧誘を阻止するだけにとどまらず、自民党と旧統一教会のつながりを追求することにも向かっていった(自民党の統一教会汚染追跡300日)に詳しい。

こうした活動の中でエイト氏に一貫しているのが、自分の正義を押し付けられないことだ。正義という言葉は立派な場によって異なるものだからだ。ただ、なぜ正体を隠して勧誘をするのか、勧誘するならば正体を明かしてやるべきではないか。あるいは自民党の政治家にしてもなぜ旧統一教会とのつながりを隠すのか、公表したうえで選挙によって民意を問うべきではないのか。こうした不自然な作りに対しては次々と疑問を投げかけてきた、まさに気骨の人である。

解散請求と 曹洞宗の立場

取材当日は、永正寺の藤木隆宣住職が同席したこともあり、曹洞宗が旧統一教会についての解散請求に反対していることについても語られた。エイト氏は、曹洞宗が旧統一教会の解散に反対していることについて、「宗教法人でなくなることで監視が効かなくなるから」という文脈で異を唱えているのであって、解散命令に値する団体ではないといっているわけではない」との認識を示した。

そのうえで、現行の宗教法人法の盲点について言及した。統一教会内部では解散する宗教法人の財務・財産については責任役員会の決議による旨の(内規があり)、別の宗教法人に寄贈できることになっているという。すなわち財産を旧統一教会の仏教系の別の宗教団体である天地正教に移してしまうことが可能である、と。また宗教法人格を剥奪するに際して、解散後には責任役員会はなくなくなるため、解散命令が確定する前の責任役員会で決めたものが有効になるのか、など、曖昧な点もたしかに多いという。

一方で、こうした曖昧な法の不備を理由に解散をせず、旧統一教会を宗教法人として残した場合でも、必ずしも社会の監視が行きとどくとは限らないとエイト氏は指摘する。また、宗教法人としてのか

たちを残せば、被害賠償の裁判を起す対象になりうるが、解散してしまうと、被害賠償ができなくなるという懸念も世間にはある。しかしこれに對しても、宗教法人を剥奪したうえで、さらに被害賠償を継続できるような法整備、法解釈をしていくべきだという立場が示された。

カルトとは何か

エイト氏が「カルトとは何か」ということを端的に述べた場面もあった。「ある程度ファジーに捉えるべき」としつつも、カルトの必要最低条件として「人権侵害が起っているかどうか」が挙げられるとし、既存の宗教団体がカルト化するともあれば、まともな団体の一部がカルト化する可能性もあると指摘する。そしてカルトの特徴として「善意で悪事をなす」という



取材に応じるジャーナリストの鈴木エイト氏。下北沢・永正寺にて。

ことが語られ、それが他の犯罪などと一線を画す点だともいう。これは言い換えれば、社会において悪事であると判定されることを善であると信じさせる何かカルトに内在していることを意味しているのだろう。

このようなことがより社会に周知されるべきだ、という文脈のもとで宗教教育の必要性についても語られた。エイト氏いわく宗教教育とは、必ずしも宗教の正しさや素晴らしさを教えることだけではない。むしろ「宗教とはいったい何なのか」とは社会問題ではない、踏み込んではいけない。これ以上のことには社会問題で「すよ」という警鐘を鳴らす、ある種のカルト予防教育的なものであるべきだろう、と。

これは、民主主義社会において国家権力とは何かを考えることに通ずるものがあるような印象を受けた。私たちはときとして国家や宗教のような、個人を超えた大きな存在

編集後記

藤木隆宣

私の長女の家族に2023年8月15日に愛犬ハク君が来た。長女の情操教育、長女は一人っ子なので友達になれ...

ハク君は長女の友達のように、家族は毎日犬に抱きついて癒しを得ているようだ。これが長女の家の犬を含めた家族関係である。人間と犬との思いやりが育っている。日本では家族、親戚、地域などとの関係性が昔に比べて薄くな...

国民が投じた1票がどの政党に政権を担わせるのかは10月27日遅くには結果が出るが、どの政党が担おうと現在の日本が置かれた現状は予想以上に大変だと思う。私も24日には期日前投票に行く予定だが、私が気になることは日本人の人間性だ。ハンマーを振り上げてガラスケースを壊し物を盗む様子がテレビを通じて流れてくる日が続いたが、今は民家に押し入って中にいた人を縛り殴り殺すまで平気でする若者が多くいることに危機感を覚える。この若者はどのような環境に育ち、ご両親から日頃どのような言葉がけをしてもらっていたのかなど気になる。

今日はこの編集後記を書くために夕方うどんを食べに入ったお店で、女子高生が一人でうどんを食べていた。私も中高校生時代は越前市(旧武生市)のお寺で老僧と二人生活だったもので、うどんを一人で食べている女子高生を見る目は自分の過去の環境とダブルのだが、目の前にいた高校生はたまたまご家族と夕飯を食べる時間が違ったのかもしれない。

私は自分の足として車を運転している。運転しておられる方には少なからず経験があると思うが、道路の左側にある一時停止を見逃し3回警察官に捕まった。捕まった違反とは一時停止をしなかったことだ。つまり車輪が動いていたらそう。2回目に捕まったからはかなり気を付けて運転していたのだが、ある人との約束があり不覚にも一時停止を怠り3回目の切符が切られた。

失敗したことは80年間に数えきれないほどあったが、中でも思い出すのは昭和41年3月に大本山永平寺に安居させていたとき、遅い安居だった

ので衆寮が長く、伝道部、衆寮、後単侍寮といういろいろな経験を積ませていただいた。当時の後堂老師はのちに大本山永平寺の貫首になられた宮崎奕保禅師だった。ある時に墨を磨るように依頼され大きな硯に2、3時間かかって仕上げた墨を、後堂寮に運び後堂老師の目の前でひっくり返したことだ。宮崎後堂老師はその時に「重いものは軽く持て、軽いものは重く持て」と諭され、今でもその時の状況を覚えている。

私は小僧生活が長かったのでお掃除の経験は長く内外に良く気が付くようになり、現在もその経験が生きている。日本人は今お掃除をしている方が多いので、とても下手のような。お掃除がうまくないといろいろなところへ気が付くようになる。嘘だと思ったら私のお寺に来て体験して欲しい。少しづつそのコツがわかるようになる。「来るものは拒まず去る者は追わず」である。

手まり学園

寄附者御芳名(敬称略) R6.8.1~R6.10.2

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Lists donors from various prefectures like Kanagawa, Shizuoka, and Tokyo.

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

(★部数により割引があります) すべて税別価格です

- List of publications including '修証義' explanation, 'まんが問答一期一話', '葬送のしおり', and various Buddhist texts with prices.

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

Table showing publication dates for '曹洞禅グラフ' (e.g., 春 彼岸号 2月10日).

お申込み

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。